
壁囲封鎖のパビリオン

龍奈 菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁囲封鎖のパビリオン

【Nコード】

N8125U

【作者名】

龍奈 菊理

【あらすじ】

少年は気がつくと島にいた。その島には別荘があり、しばらくその別荘に住まわせてもらうことになったのだが、その島で起こる不可解な事件に巻き込まれていく。

それは、暑い暑い夏の季節の出来事だった……

俺たち家族は、毎年恒例の船旅を楽しんでいた。

だが今回の船旅だけは、なんだか悪い気がしてなかった。

母親もそんな不安げな感じをかし出していたが父親の無理やりで今年もやることになったのであった。

俺は、このときの判断を悔やんだりはしない。

だってそれが運命だったのだから。

俺たち家族は、ある島の脇を通り過ぎようとしていた。

なぜかの天候不良でいつものルートが使えず急きよ他のルートに変わったそうだ。

その島の脇を通っていると、いきなり嵐が出てきた。

「くそ こつちにも嵐が来ちまったか」

そんなのんきなことをいいながら父はわらっていた。

だが、母のほうは何かに脅えるような感じで毛布にかぶさり極度にふるえていた。

母は、少し赤みのかかったワンピースを着ていたのだがそのワンピースもぐじゃぐじゃになっていた。

行く前の父の話だとワンピースを着たことを見たのは久しぶりだと言っていた。

僕は、はじめて見るなと思い返していた。

そんなことを思っていると少しずつだが体調が悪くなっているように見えた。

「大丈夫？」

余りにも見るに見かねた僕は、母を心配して背中をさすってあげた。

「大丈夫だから、お父さんの隣についてあげて・・・」

そう言っただけで余り近づけないようにしていた。

今までの母とは、全くちがった感じをかし出していった。

「お父さん、お母さんが体調が悪そうなんだ」

父は、この嵐のせいで忙しく母にはきずいてなさそうだった。

「今からでも遅くないから、引き返そう」

そう言っただけで今回の船旅を終わらせようとした。

だが返事はなく、何かに取りつかれたかのように真剣になっていた。

少しすると、嵐は激しくなりいまにも波に飲み込まれそうになるぐらいだった。

「一気に突っ切るぞ！」

父がそう勢いよく言うと、一気にスピードを上げようとした時、轟音が鳴り響き3メートルぐらいは軽く超えてしまふ波が襲ってきた。

「うあああああああ！」

俺たち家族は大波に飲み込まれた。

気がつくと砂浜に打ち上げられていた。

近くには、船と思われる残骸があちらこちらに転がっていた。

回りを見渡しても誰もいなかった・・・

しかも、波に襲われた時はあんなに嵐がすごかったのが今では、太陽をギラギラに輝かせた灼熱地獄になっていた。

少しの間あたりを散策してやっと見つかったのが父が常に身につけていた腕時計が波打ち際に投げ捨てられていた。

この時計は、父が手放さず身に着けていた時計だった。

話だと、この時計は代々受け継がれていた時計だそうで、”自分が死ぬ時”に自分の息子に受け継がせていたと、聞いたことがあった。

俺はこの時、まさか”もう死んだんじゃない”と、一瞬頭の中をよぎった。

だが、俺は諦められなかった。

まだどこかで生きているんじゃないかと。

そのためにも俺は、ここから出なくてはならない。

気持ちを改めて、落ちていた父の形見である時間が止まっている腕時計をつけて、よくドラマなどである”SOS”を砂浜にでっかく書きつけていった。

砂浜を少し歩いたところに森が広がっていた。

俺は、まだ昼間なので何か食料と水はないか探すため森の中へ、足を踏み入れていった。

少し歩いているとグレープばい果実がなった木を見つけちょうど喉もカラカラだったのでそれに飛びつきむさぼった。

少しそこでとどまっていると人の足音みたいなのが聞こえ、不安でいっぱいだった俺は、助けを求めるように走っていった。いきなりぶつかり合った。

「いてて」

尻餅をついた尻を撫でながら起き上った。

目の前を見るとそこにいたのは、”白い”ワンピースを着た女の子がいた。

その女の子につい見とれてしまうほどの可愛さだった。

黒髪のアトレートにカチューシャをつけていた。

たぶん僕と、同じぐらいの年齢だと顔からしてわかった。

少し、見とれてしまった。

「あの～すみません」

見とれるのをやめて手を差し伸べた。

「だいじょうぶ・・・です・・・」

少し顔を赤くしながらそう言って自分で立ち上がろうとしたが、滑ってまた倒れてしまった。

もう一回、手を差し伸べたら顔を真っ赤にしながらその手を取った。

何で恥ずかしがっているんだ？

と思たが、まっいいかとすぐに思い返してしまった。

「ここはどこなんだ？」

俺は、この子にわかることだけでも質問しようと思った。

「ここは、私の・・・父の持っている・・・無人・・・島です」

ちょっと聞きとりずらいながらも、その言葉に「マジですか!？」
と言いたい気持ちを必死に抑えてが、次の言葉のすごかった。

「この近くに・・・父の別荘もありますよ・・・」

こんな島に”別荘”を建てるやつがいたのかよ、そんなんことを
思うと安心してしまった。

この島は、自分だけかと思っただけでちゃんと人がいること
に安心してしまった。

今まで、この島でのことで鞭を打っていた身体と心が、楽にな
ったような気がすると思えた。

「大丈夫ですか!!」

そんな声が遠のく意識にかすかに聞こえたのだった。

「あなたは・・・このし・・・まから・・・で・・・なくて・・・
は・・・いけない!」

微かに聞こえたよような感じがした。

「あなたはいつたいたれた？」

「この・・・島からはやくでて」

「だから君は一体だれだ？」

「早くこの島から出て」

「早く出て・・・」

「待ってくれ！待つんだ——！！」

「ハッ！！」

気がつく俺は、ベットの上に寝かされていた。
回りを見渡すと一つ個室だった。

隣を見ると看病してくれたのだろう白いワンピースを着た女の子がイスに座ってうたた寝していた。

「あのー起きてください」

俺は控えめにしながらも女の子の体を揺さぶった。
そうすると少し目をかきながら起き上ってきた。

「キャッ！」

叫びながら後ろに、顔を真っ赤にしながら下がっていった。

「あのーここはいたいどこですか？」

そう聞こうとしたら、出てってしまった。

「なんで？」

何で出ていくんだ？

俺は、疑問をかんじながら自分が服を着てないことに！！きずいた！？

あゝなるほどね・・・

これでか逃げ出すわけだよ・・・

苦労するなゝ

そう実感してしまった。

隣を見ると、棚の上に服が置いてあった。

その服は、普段じゃなかなか気なそうな、白のスーツが置いてあった。

一応着てみるとサイズがぴったり合ってたのでびっくりしてまった。

そんなことをしているとノックをする音が聞こえつい「はい」と答えてしまった。

そうしたら、扉が開きできたのはメイドの服を着た女性だった。

「メイド長の塩原麗子と言います。」

「以後お見知りおきを・・・」

そう言つと付いてくるように言われ、付いていった

2 前夜

少し長い廊下を、少し歩いていった。

移動している時に、50歳代ぐらいかなとどうでもいい事を考えてしまった。

付いていくと、そこには縦長の長いテーブルが置いてあり、その上には皿が綺麗に並べられおり、その皿にはまるで精霊の粉でも散りばめたようなキラキラ輝くイタリアン料理のような物が所狭しと置いてあった。

（「ような」って言ったのは、食べた時がないので良く分からないからである。

ちゃんとみると高級食材を使ったような料理まで置いてあった。料理に見とれていると、縦長のテーブルの一番先に座っている60代ぐらいの白いひげを自慢げに生やしているお爺さんから声がかかった。

「さあ席についてくれたまえ」

どうやらこの館の、主人のようだった。

僕は、言われるがままに、メイドの人に案内され、あの白いワンピースを着た女の子の隣に座った。

女の子は、少し顔を赤くしながらこっちを振り向こうとしなかった。

僕は、つい質問してしまった。

「何で？親切にしてくれるんですか？」

僕は、不思議で不思議で堪らなかった。

「なあにただの気まぐれだよ」

「それに明日は・・・年に一度の七夕パーティーなんだよ。パーティーは多くいたほうが楽しいだろ。」

・・・ふふふ・・・

そう言つて少し裏の顔でにやけた様に見えた。
が、気にしないようにした。

こんなに優しい人が、俺が考えてしまったようなことを起こす訳が無いと思つたからである。

そう、そんなことを考えてしまつたらせつかく親切にしてくれたこのお爺さんに失礼だからだ。

「おつとすっかり紹介を忘れるところだつた。私の名は、神谷総一郎。そして、この別荘の主人でもある！ほおっほおっほおっ」
なにやら少し自慢したような満民のを笑みを生みながら言つてきた。

「そうですかあゝ」

僕は、それに対しなんと反応したら言いか分からず受け流したことに、少し気分を悪くしたようだつた。

僕は、慌てて話を変えようとしたが、何に話を変えようか全然思いつかなかつた。

「父さん、誰だそいつは？」

何処からともなくスツとした切れのある声が聞こえてきた。

俺は、ほつとしたこれで話が変わつてくれると思つたが、その考えが甘かつた。

「誰だ？お前？」

声が聞こえたほうを振り向くと、俺が通つてきた道に立つていた。

その姿は、声に似てキリツトした顔に少し細いメガネをかけ、本当に何もかもがスツとしたいでたちだつた。

服は、俺が着ている紳士服の純白の白の真反対の光沢がかつた黒色だつた。

「まさかまた養子とか言いませんよね？」

「困りますからね、もう一人だなんて・・・」

「こら！その事は言わないはずだぞ！」

一瞬よどんだ空気になつてから、総一郎さんが怒鳴り付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8125u/>

壁囲封鎖のパビリオン

2011年10月9日11時52分発行